

パウダーレスインキ「キレイナ」の実力 (広告)

13. 驚きのセット [ダイサン]

(株)ダイサン(齋藤慎一社長、栃木県さくら市)は、タウン誌や月刊誌などのページものの印刷を中心とする、栃木で最大規模の総合印刷会社である。印刷はもちろんだが、クライアントへの企画やデザインの提案、企業としての環境配慮にも力を入れている。

印刷機は、菊全判4色機2台と同両面8色機1台、そして4色と1色の軽印刷機とPOD機を設備し、1,000~30,000部の幅広いロットの仕事を手掛ける。印刷品質には定評があり受注を伸ばしてはいたが、その一方でスプレーパウダーのボタ落ちに常に頭を抱えており、T&K TOKAからパウダーレスインキ「ベストワン キレイナ」の提案を受け、2015年春に菊全判4色機1台に導入した。

さらっと感が違う!

同社の伊藤也寸志・製造部部长兼工場長と湊竜史・印刷部印刷課課長は、キレイナをテストしたさい、特殊樹脂によってインキ表面が短時間でベタつき

がなくなることに「さらっと感が違う!」と驚いたという。従来のインキでは刷り上がってから半日は乾燥のため置いていたが、キレイナでは早ければ4時間ほどで断裁などの次加工へ回せるようになった。

導入の目的であったパウダーの削減効果は大きい。パウダー散布量が減ったことで、ボタ落ちトラブルが大幅に減り、顧客からのクレームもなくなったという。

「パウダーのボタ落ちなど細かい汚れの印刷物を、検査装置で取り除こうと装置の判定基準を厳しくすると、人の目に見えないものまで損紙扱いになり、輸入紙など質の劣る用紙では1万枚刷っても600枚しかOKシートにならなかつたりします。それがキレイナにしたところ、明らかなボタ落ちがなくなり、顧客からのクレームもゼロになりました」(伊藤工場長)。

キレイナの効果を実感した現場は、今では両面8色機でも、品質要求の高い仕事の場合はキレイナを使用している。



現在の菊全判両面8色機のデリバリ部。キレイナを使う以前はパウダーで真っ白になっていたという



菊全判4色機、伊藤也寸志工場長(右)と湊竜史課長。オペレータは、以前はパウダーを吸わないようマスクを着用して作業していたが、それも不要になった



菊全判機でのキレイナの効果が良好だったため、軽印刷機でも試したところ、とくに問題もなく使用でき驚いたという

オペレータの負担減

伊藤工場長によると、キレイナの採用により顧客クレームが減り満足度が向上したこともメリットではあるが、それ以上に「オペレータの負担が減ったことの方が大きい」という。コート紙では板取りが不要になったほか、印刷機や空調フィルターなどの掃除の手間、パウダーによる人体への影響などが低減したという。もちろんメンテナンスなどにかかるエネルギーコストも削減できた。

たとえば、以前は毎日1時間・週末は2時間かけて印刷機のパウダー汚れを掃除していたが、それが半分になった。また両面印刷の大ロットの仕事では、仕上り面を印刷するさいに以前はブランケットを4000回転ほどで掃除しなければなら

なかったが、キレイナでは7000~8000回転までもつようになったという。そのため、従来メンテナンスに充てていた時間を仕事にまわせるようになり、作業効率が向上したという。

インキ濃度がアップ

キレイナによるパウダーレス印刷をうまく運用するには、次の点を心がける必要がある。

- ◇印刷機のメンテナンス、温度・湿度管理の徹底
- ◇湿し水の適正なコントロール
- ◇適正濃度での印刷
- ◇排紙部での印刷物のふんわり着地
- ◇ローラや印圧の適正調整

同社は従来から印刷機のメンテナンスや湿し水の管理に力を入れており、それがパウダーレス印刷を難なく可能にした。とくに湿し水を絞ることは、インキの濃度向上と使用量削減につながった。「当社は従来からインキや湿し水の管理をマメにやってきました。キレイナは水を絞っても汚れにくいため、刷りやすく、インキの濃度が出て助かりますね」(湊課長)。

さらに同社は、軽印刷機の封筒印刷でもキレイナを使うことがある。小さな機械でも汚れにくくインキに光沢感が出るため、上品できれいな仕上がりになるのだという。(つづく)

革新的なパウダーレスインキ「ベストワン KIRÉINA」誕生。

キレイナ印刷
キレイナ加工
キレイナ機械
キレイナ工場

BEST ONE
KIRÉINA

T&K TOKA

株式会社 T&K TOKA <http://www.tk-toka.co.jp>
TEL 049-258-1611(代表) 埼玉県入間郡三芳町竹間沢283-1 〒354-8577